

# 伊吹咲那への尋問

重たい瞼を開く。

鉛のような脳を振るって、無理矢理目覚めさせる。そして周囲を見回した。四畳半ほどしかない部屋で、壁は白い。十字の切れ目が走っており、パンのように防音用のクッションが膨らんでいた。見物人のように機械類が並び、赤色に点滅したり、メーターが沈黙したりしている。横にはガラス棚があり、英名の書かれた瓶が並んでいた。

天井からは、白い蛍光灯とカーテンレールがぶら下がっている。レールは私の四方を囲むように走っており、病院然とした水色のカーテンが背後でまとめられていた。

そして――、

「なによ、これ……っ！」

部屋の中央に置かれた拘束椅子。私はその上に固定され、動けなくなっていた。

椅子はL字のシルエットを象っており、そこへびっちりとした長座の姿勢で座らされている。脇を閉め、内腿をくっつけている。首と両の手首に革製のベルトが回されており、足首は一纏まりにされていた。

何度か力一杯に引っ張ってみたが、ビクともしなかった。ベルトはガッチリと絞められており、私は身体を振ることしかできない。

……そうだ、と記憶がはっきりしてくる。私はある施設への潜入作戦中であった。そこでは淫魔達が魔力に関する実験を行っているとの噂があり、調査のために訪れたのであったが――。

発見され、戦闘となり、そして敗北したのだ。

「くそ……っ」

悔しさが込み上げてくる。あんな奴らに不覚を取るなんて……。

とにかく、敵地で拘束を受けている状況はマズい。すぐに脱出をしなければ。幸い戦闘衣装はそのままだし。

まずは拘束台を破壊しようと、霊力を練り出す。

そのとき。

しゅううう、という空気の漏れ出すような音が部屋に響き出した。

「まさか……ガス！？」

ピンク色の着色された気体が、たちまち室内を埋め尽くしだす。それは熱を纏っており、サウナのように温度と湿度を高めていく。

初めは息を止めて、全く吸わないよう気をつけていた。

しかしガスがみっちりと充満し、視界を覆い隠し、壁の模様すら見えなくなった頃——私は窒息の苦しみに耐えかねて、ぶはぁ、と口を開けてしまった。

たちまち口腔と鼻孔が甘ったるいような味で満たされる。

「〜〜〜ッ！ げほっ、げほっ……何！？」

有毒感の溢れた匂いが、そのまま気管や食道へと流れてしまう。こんなもの吸いたくはないけれど、背に腹は代えられない。

頭のなかが侵されてぼうっとしてくる。

同時に、下腹部に“じくじく”とした疼きを感じられた。

思わず舌を打った。そこには、かつて淫魔に刻まれた淫紋がある。子宮を示す位置で嫌らしい模様が淡く光り出し、私の内臓へと興奮を伝播させている。膣の奥が濡れだすのが分かり、乳首はむず痒くなってきた。

反応している……。つまりこのガスは、媚薬……？

呼吸を最小限に留めないと。きっと吸いすぎたら戻って来られなくなる。

「もう、最悪……っ！」

私の悪態が、ピンク色の靄のなかで虚しく響いた。

「ぜえーっ、ぜえーっ、ぜえーっ、……」

あれから1時間……いや2時間以上が経った。多分そのくらいだ。はっきりとは分からない。計算とかそういう細かい思考が働かないのだ。

熱い……。うだるように熱い……。

媚薬ガスで全身を蒸し続けられている。

バケツの水を被ったように、肌という肌から発汗している。大粒の雫となって鼠径部を滑り落ちたり、レオタードのクロッチをぐっしょりと湿らせたりしている。

ふーっ、ふーっ、と呼吸が荒い。吸っても吸っても熱くて甘いガスしか得られず、うんざりだった。疲労感を出しながら肩がゆっくりと上下する。喉がヒリヒリと痛む。ひどく胸焼けがする。また顎から、ぽたり、と汗が垂れて胸を汚した。

淫紋から嫌らしい感覚がじんじんと響き渡る。それは性感帯を揺るがして、私に性的な興奮を促した。ドッドッドッドと心臓が騒がしい。股間をもぞもぞと動かしてしまう。

戦闘衣装の内側が蒸れている。両脚がぐっしょりと濡れたニーソックスに包まれていて気持ち悪い。腹部をピッチリと覆うレオタードの裏側は狭く、肌との隙間で汗が温度を高め、やがて気体となっていく。それは上昇し、露出した谷間からむわりと漂ってくる。首元を固定されている私は、その淫靡な空気を直接鼻孔で受け取ってしまう。ガスの甘さと、汗の香ばしさと、興奮した女体が出すツンと鼻を突く匂い——。それらの混ざりあった耐え難い香りが鼻孔に充満する。うっ、と顔をしかめる。その香りが自身から発されているという事実を認めたくない。媚薬ガスと淫紋の効果で体臭が変わるほど発情してしまい、そんな状況にただ身を振ることしかできないという敗北感。

ちくしょう……。いつまで続くの、これ……。

水分不足にはなっていない……。きっとガスの効果だろう。だから死ぬことは無いかもしれない。だがこの湿度に耐えられない。纏わりつくガスも、汗も、発情を高めていく身体も、限界だった。誰も見ていないことを良いことに、犬のように舌を出して呼吸をしてしまっている。

最もツライのは、脇の痒さである。拘束の姿勢から二の腕によって閉じられていて、その奥がたまらなく痒かった。かつて淫魔に開発されてしまい、性感帯に成り果てた私の脇——。興奮に伴って、そこも発情しているんだ。嫌だ、気持ち悪い。考えたくない。こんな身体嫌だ。

こんこん、とノックの音が響いた。

ガチャ、と扉の開く音がする。しかし視界不良のため視えない。

コツコツとヒールの音を鳴らしながら、霧の向こうから白衣の女性が3人現れた。

彼女達の顔を見て、高熱で呆けていた私の頭がパチッと目覚める。

淫魔だった。

「うわぁ、すごい匂い」

淫魔の一人——赤髪の女性が鼻をつまむフリをして、からかうような口調で言った。

「これ入って大丈夫なの？ 私ら淫魔には無害とはいえ、気が引けるわぁ。……あ、咲那ちゃん。お加減はどうですかぁ？ もう大分キちゃってるみたいですねえ。やらしー匂いがぷんぷんしますよぉ」

「こちらとしても仕事がやりやすくて助かります」青髪の淫魔が、白衣からタッチパネルを取り出して叩く。「早いこと移りましょう」

「……」残る緑髪は何も言わずに、ガラス柵を開けていた。

見慣れぬ赤と青と緑の3人。私は警戒を強めて睨みを効かせる。

「誰、あなた達……」

「私達？ ここの職員だよ。咲那ちゃんにはこれから、尋問を兼ねた調査を受けてもらいます」

「……ふっ」

私の口から思わず笑みが溢れた。

淫紋達が首をかしげる。

「なんだ、何をするのかと思ったら……尋問？ 調査？ やっぱり淫魔の考えることなんていつも同じね。どうせまた、馬鹿みたいに私の身体を弄くり回すんでしょ？ そんなの経験済みよ」そう、私は過去に淫紋や脇の開発などを受けている。それは屈辱の歴史でもあると同時に——成長の機会でもあったわけだ。「そこいらの退魔師と同じだと思わないことね。あなた達のやり口なんてとうに知ってるんだから。どーぞ、好きにしたら？ 私は、絶対に、何も話さない」

一気に言い切って、ギロリと睨みつけてやる。

これから淫靡な責めが始まるかと思うと憂鬱であったが、別に処刑とか拷問をされるわけではないのだ。だったら耐えられる。別に強敵を倒すとか何かを壊れないように守るとか、そういう無理難題じゃない。

ただ言わないだけ。それだけのこと。

「その生意気な口調……。まだご自分がよわよわ退魔師だって理解されてませんね」青髪が面倒臭そうに肩を落とした。

緑髪が大きな瓶を持ってきて、その蓋を開けた。溜まっていた湯気が溢れ出す。

赤髪がその瓶口へ両手を突っ込み、内部でもぞもぞと動かしている。

何をする気だ……。？ と私は唾を飲んでその光景を見ていた。

——そして赤髪の両手が引き抜かれる。

ぐばあ、と粘度の高い水音が響く。

現れたのは——白濁としたローションを滴らせる一対の手袋だった。

「ひ……。っ！」

思わず顔を引きつらせてしまう。

手袋の全体には細やかな毛が装飾されており、書道で用いる筆のような質感である。その毛束の内部に、長い間漬け込まれたのであろう白濁色のローションがたっぷりと染み込んでいる。両生類じみた光沢とヌメリ気を放ちながら、どろどろと垂れそぼっていた。

淫魔達は手分けをして瓶を回し、3人とも同様の手袋をはめた。

両手を手術前の医者のように掲げて、私の周囲を取り囲む。

「何、それ……。？ 何なのよ、その手袋は……。っ！」

「じゃあ……。咲那ちゃんのお身体、隅から隅までゼーんぶ調査しますねっ」

緊張で身体を強張らせる私を嘲笑うかのように、計6つの手袋が肌の上へ着地した——。

3人の淫魔は、それぞれ別の部位を同時に責め立ててきた。身体中のあちらこちらで手袋のたまらない感覚を味わわされ、処理しきれぬこそばゆさに脳はあっという間にキャパオーバーする。どうにか感覚を遮断してやろうとか、脱出する方法を考えなくてはとか、そういう思考が出来なくなる。

崖っぷちへ立たされたように、ただ目の前の気持ちよさをやり過ごすので精一杯だった。

「ふ、あ、あっ!？」

赤髪は背後に立ち、まず腕へ手袋を這わせてきた。

グレーの極薄生地包まれた前腕を、そっと包むように掴まれる。後ろから優しく抱かれるみたいだった。

——くちゅ

「……ひっ、う」

異様な触感に思わず声が出てしまった。

生暖かく、人感的な熱をはらんだローション。生地越しにその暖かさを感じる。手袋の平を押し付けられると、行き場を無くした毛が私の上でずるりと滑って潰れていった。その柔らかい感触はうねるモップを想起させる。

赤髪は、私の前腕の細さを確かめるように手袋をくるくると回した。衣装を洗浄されているみたいだ。生地の表面が白くコーティングされていく。

青髪は腹の辺りを撫で回してきた。レオタードの上に手袋を滑らせて、真っ黒な衣装のツヤをなぞり、カタツムリのように汚していく。下乳に触れるか触れないかといった瀬戸際から、伸びやかな腹のラインをなぞり、へそのくぼみへ中指を押し込みつつ、下腹部まで這わせてくる。するとなだらかな身体の輪郭に沿ってぬらぬらとした軌道ができてしまう。巨大な生物に思い切り舐め上げられたようで、ひどく不快な光景だった。戦闘のための大切な衣装が汚されていることも我慢ならない。

やがてレオタードの下にある淫紋に気が付いたようで、その場でくるくると人差し指を回してきた。否応なく意識させられ、羞恥心が込み上げてくる。彼女の指使いが煽ってきているのが分かる。思わず顔を下に向けると、青髪と目が合った。

「これは何ですか？」

私は答えずに目をそらした。

青髪は人差し指で淫紋をなぞってくる。レオタード越しに、毛がずるずると引きずられるようにして擦ってくる。発情の中心部をそのように触られると、どうしても下半身全体がピクッと反応してしまう。

「どうしてこんなものが子宮の上に刻まれているんですか？ ああ、いえ。答えなくて大丈夫です。咲那さんはやっぱり——よわよわ退魔師さん、ってことですね」

ぐっ、眉間に皺を寄る。だがかつて刻まれてしまったことは事実なので、何も言い返せない。

「さっきから腰が動きそうになるのを我慢しているのが、丸わかりですよ。じくじく疼いて仕方ないんですか？ 尋問するまでもなく淫乱だったなんて、驚きです」

好きでこんな身体になったんじゃない！ ——そう叫びたかったが、プライドが許さなかった。そんな情けない台詞死んでも言ってたまるか。

リーリエ……ッ！

私はこの淫紋を刻んだ淫魔へ、一層の憎しみを滾らせた。

負けてなるものか。淫紋なんて些細な問題で、私には全く意味が無いんだって思い知らせてやる。

決して尋問には負けない。負けてはならない。

緑髪は足元にて、ニーソックスの上へ手袋を落としていた。両腕を一杯に広げて、私の長い両脚の——脛の微かな膨らみ、膝の角張り、そして太腿の下部——まで撫で上げると、ピタリと止める。肌の露出した上部は触らないように気をつけているみたいだった。

愛撫というよりマッサージのようだった。両脚の曲線をなぞるように、足首からズーッと切れ目なく手袋を這わせてくる。脚の肉を流しているようにも見える。そしてニーソックスの境目でピタッと止めると、今度は足の方へ降りていく。

ぞわぞわぞわぞわ——と悪寒のようなものが迫り上がってくる。

「……っっ！」

手袋の感触が脚を這い上がってくる度、鳥肌が一齐に立つ。何度もその形を確かめられる。膝裏の窪みまできちんと手袋を回され、普段意識すらしないような箇所でも毛とローションの感覚を味わわされた。

文字通り薄皮一枚隔てた感触は、確信的な触感を与えず、その気配だけを濃くしていく。前腕の直径。レオタードのライン。そして脚の曲線。これが肌に直接触れてしまったら——と私は何の意味も無い想像を掻き立てられて、一人で勝手に混乱していく。自然とベルトを鳴らす両手の動きが大きくなり、ガチャガチャと空しい金属音を響かせた。

「無駄だよぉー？」赤髪が楽しそうに背後から囁いてくる。「それは凶暴な淫魔ですら壊せないような代物だからね。その淫魔に敗北した咲那ちゃんに壊せるわけありませーん。ふふ

ふっ」

馬鹿にするように笑いながら、くちゅくちゅと手袋で生地を撫でる。

「く、そ……」敗北、という部分を強調されて、私は悔しさに歯噛みした。何かを言い返さなければ済まない気持ちになる。「……こ、こんなガチガチに縛って、3人がかりで愛撫だなんて……恥ずかしくないの？　こんな拘束なければ、あなた達なんてすぐ殺せるのよ？」

「わ、怖ーい」赤髪がおどけてみせる。「じゃあ早く殺さないと……咲那ちゃんのすべすべお肌、ぐちゅぐちゅ～ってされちゃうよ？」

「え——」

ずずず……、と手袋が二の腕へと這い登ってきた。

レオタードの裏側にある脇腹へと侵入してきた。

太腿へと到達してきた。

——露出した肌の上へ、その触感が直接あてがわれたのだ。

「ッ、あ……！？」

そして淫魔達は、本腰を入れての愛撫を開始する。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、——

「う、あ……っ！　ふあ、っ！　や……！」

媚薬ガスと室温と淫紋によって蒸され続け、じっくり仕上げられた私の柔肌——。風が通るだけでもこそばゆさを感じてしまうほど、敏感になっている。

その上を手袋による高刺激が這い回りだしたのだ。

「あ、う……っ！　やだ、やめなさ、い……っ！　こんなの……っ！！」

たまらない感触が身体のアちこちで感じられ、私はぎゅっと全身に力を込めた。そうやって耐えていても絶えず愛撫は繰り返され、二の腕を往復し、脇腹をほじくり、太腿を撫で回す。

毛の表面にはザラつきがあり、擦れる度にぞわぞわとしたくすぐったさが沸き起こる。通



過した箇所は問答無用で鳥肌が立つ。一本ですら声を漏らしてしまいそうなのに、手袋の表面に装飾されているのは数え切れぬ程の密集である。手袋の裏側で——無数の毛が私の肌に密着し、淫魔達の手付きに合わせて蠢き、細やかにくすぐったさを何十本と同時に送り込んでくる。ローションを吸い込んで重たくなった毛が、ずるずると這いずり回っている。「いや……っ！　気持ち、悪い……っ」私の制止を全く無視して淫魔達は愛撫を続け、肌が柔らかく擦られていく。硬さと潤滑を併せ持った摩擦がぐちゃぐちゃに混ざり合って、右へ左へ、上へ下へ、縦横無尽に私の上を動き回る。その軌道や回転一つ一つをしっかりと知覚してしまうので、どうしようもなくなってしまう。

粘っこい音がうるさく響いている。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ、——

「どうですかー、咲那ちゃん？」赤髪が耳元に口を寄せて、そっと訊いてくる。「お肌の上に直接ローション塗りたくられてますよお。気持ちいいよねえ？」

彼女はそう言いながら、二の腕を揉みだした。私の細い肉が圧迫されて、ふにふにと姿を変えていく。クッションが弄ばれているようだった。

「気持ち良いわけ、ないでしょ……っ！　ほんと、悪趣味……！」私は自身の感じている確かなくくすぐったさ——それに伴う気持ちよさを、どうにか否定したくて声を荒げる。「こんなことで、ホントに情報を得られると思ってんの！？　馬鹿みたい……っ」

「そう気を急がないで下さい」青髪がそう言った。そして彼女は、脇腹をさすり出した。輪郭をえぐる私のくびれ。その凹みの部分を左右から挟み込み、ずるり、ずるり、と手袋を動かす。さらに削るかのように毛の密集でさらり上げる。

「ふ、あ……っ！？」脇腹は、人体がくすぐったさを特に感じる部分だ。二の腕や腹部で感じていたものが、何倍にもなってゾワリと掻き立ててくる。

「ここ、弱いんですか？　声出ちゃいますか？」

「うる、っさい……！　別に、そんなんじゃないから……っ！」

ピタピタの薄布の裏は窮屈であったが、ローションの潤滑が動きを助けている。故につつがなく手袋は這い回っていた。まるで洋服に潜り込んだ虫のようで、衣装の一部が盛り上がって蠢く様子は趣味が悪い。

青髪はまず、細いレオタードの両側で露出している下腹部を撫で回す。淫紋にはあえて触れずに周囲を満遍なく撫でることで焦らしてみせたり、淫紋の上ばかりを指でくちゅくちゅと弄ることでその淫靡さを意識させたりした。どちらもうんざりするほど意地の悪い手付きなため、私は股間の奥をじくじくと一層疼かせることになる。

そして鼠径部をくぼみに沿ってなぞってくる。その溝に指を挿し込むみたいにしてから、ずずず……、とゆっくり動かす。先程のガスによる焦らしのせいで、肌の露出した下腹部全体にはじっとりと汗が滲んでいる。手袋が通過する度、白濁のローションが透明な汗に混ざり、色を薄くしている。反対に、匂いはより香ばしく嫌らしいものへと変化していった。

そういった液体が鼠径部の線に溜まってしまうほど、青髪は丁寧になぞりあげてくる。脇腹から脚の付根にかけて指が降りていくと、触感が急所へと近づいていくのが分かって、「っう、くっ……！」と唇を噛んでしまう。だが股間に触れる寸前で指は止まり、今度はツツツ……と上がってくる。行きで鼠径部に溜まった液体が、搔き出されて下へ流れていく。

長座の姿勢で脚を閉じているため、股間と太腿の隙間に三角の“溜まり場”ができていた。レオタードの表面や下腹部から垂れてきた白濁液と、顎の先や太腿から染み出した汗が、どろどろとした液体になって嵩を作っている。その水中では、私のクリトリスが浸されていた。じわじわとした暖かさを感じる。そして微弱な電波でも流されているようにピクピクと震えてしまう。ローションと汗と媚薬が特別に濃く混ざり合っている淫靡な液体に、女体で一番の性感帯が長時間潜水していたなら、当然だと言えよう。（そう自分自身に言い訳をしないとやってられない）意識しないようにと考える程、意識してしまい、クリトリスは勝手にも勃起していつってしまう。だがレオタードは股間の谷がハッキリするほどに張り付いているので、肉豆が満足に勃つことはできず、抑えつけられ横向きになっていた。それは幸い淫魔達にはまだバレていないようである。だけどレオタードの締め付けが刺激となってクリトリスを硬くしていつているのも事実で、そんな“おあずけ”状態に私は内腿をもぞもぞと擦り合わせるしかないのだった。

ぴったりと合わさった太腿の間へ、緑髪が手袋を抽挿していた。肉と肉のたっぷりとした隙間へ、ぬちゅ、ぬちゅ、と何度も手を差し入れる。「、っ……！　ふう、……っ！」内腿の神経が集まっている部分を毛が擦り上げてくる。そして出し入れする動作は擬似的な性行為にも見えるため、強い屈辱感を生んでいた。ニーソックスの段差に押されて盛り上がっている肌色の肉を、摘まれたり、揉まれたり、好きに遊ばれる。また手袋が抜き差しを始めると、拘束台にもったりと広がっている全体がそれに合わせてぶるぶる揺れていた。脂肪の厚みや女体特有の柔らかさが強調されているようで、非常に恥ずかしい光景である。緑髪は黙ったまま、私の脚の間へ、両手をぬちゅ、ぬちゃ、と飽きもせず抽挿していた……。

一度手袋に犯された場所は、白濁色のローションで濡れてしまう。そのべたつきはしつこく、ローション自体がなかなか流れていかない。粘度が高いのだ。ゆっくりと緩い水飴のように垂れていく。そのため、現在手袋が触れていない箇所さえ、ヌメヌメとした触感が

じんわりと沁っていく感覚に苛まれた。

身体に視線を走らせると、その白濁とした嫌らしい姿に辟易とした。衣装も肌も汚れきっている。身体を微かに動かす度に、衣装の内側でローションがぐちゅうと擦れて気持ち悪い。あまねく触感で愛撫を知覚する。液体の流動を感じ取ってしまう。

霧がかったような媚薬の湯気のなか、発情した身体は否応無しに呼吸を早めていく。それにより更にガスの巡りが促進される。もう吸いたくない、吸ってはダメだ、とどれだけ思っている、肉体的な反応によって無視されてしまう。湿度の高い密閉された尋問室で——だくだくと身体中から嫌らしい体液を滲ませている。手袋はそれを掬い取り、また肌へ馴染ませてくる。

まるで巨大な生物に飲み込まれ、唾液の滴る口腔内にて無数の舌で味わわれているようだった。淫魔達の手付きは鬱陶しく、私の柔らかさやしなやかさをしっかりと記録するみたいに動いている。そのように肌の奥まで吟味されながら、どこをどう感じてしまい、何が弱いのか、そういった秘密が晒されていく。私が必死に反応を抑えても、ピクリと身体を震わせれば目ざとく見逃さず、手袋で集中的に擦ってくる。そんなことをされては我慢もできなくなり、「ん、あ……っ！？」と声を上げてしまう。淫魔達は「ほらね？」とでも言いたげに頷くと、その弱点へ徹底的に媚薬を塗り込んでくるのだった。

下腹部を楽しまれた後は、再び脇腹に張り付く薄布のなかへ——青髪の手袋が侵入してくる。衣装の締め付けるキツさに合わせて、手袋はギッチリと密着してくる。それだけ毛やローションの感触が明瞭となって、擦られる硬さも上がる。ずりずりと手袋全体で撫でてくる。

「ああ、もう……っ！ うっざい……！ 脇腹あ、ばかりい……っ。」

最初は黙って動かないまま耐えてやろうと思っていた。しかしすぐに、それは無理だと分かる。くすぐったさは勝手に身体を動かすし、そのまま受け止めるにはツラすぎる感覚だ。

諦めた私は、こそばゆさが嫌になって腰を振り出してしまう。お腹をぐねぐねと動かしてみよう。しかし衣装がピッチリしているので手袋はズレることなく、変わらずずりずりとくびれを撫でるのだった。

「いいですよ、咲那さん。どんどんくすぐったさを上げていきましょうね。あなたはどこまで“高まる”ことができるのか。あなたはどこをくすぐられたら特に高まってしまうのか。これはそういった調査なんです。今後のあなたへの効率的な尋問や、他の退魔師の方への尋問、そういったところで活用させていただきます」

青髪の口調は淡々としており、手付きも非常に事務的であった。

私は、自身の内側に発生している余裕のない感覚と、彼女の何でもなさそうな素振りを比べて、むかむかと腹が立ってきた。いつもやってる仕事みたいに、私のことを責めやがって……！ 私は気高い退魔師なのに。こんな扱い許されるわけない。

苛立ちが、口から悪態となってまろびでてしまう。

「……そうやって、同じことばかり……。あなた達淫魔って、ホントに発展性がないわね。やれ触手だ、やれくすぐりだ、馬鹿の一つ覚えみたいに……。こ、こんな尋問も……さっさと諦めたら？ 私は吐かないって……もう、分かったでしょ……？ 全く効いてなんか無いんだから……。ねえ……！」

「発展性ですか」ふむ、と青髪が頷く。「——例えば、こういう風に手付きを変えてみるとか、ですか？」

青髪が、ワシ、と五指を曲げた。  
指先で素早く脇腹を引っ搔いたのだ。

「っああ！？」

驚いて、私は声を上げてしまう。

その反応に手応えを感じたのか、青髪は脇腹全体を揉むようにワシワシと指を動かした。ゾリッ、ゾリッ、とくびれの奥を毛が局所的に擦り上げる。

「ふ、うっ……！ う、くっ！ やめ、なさい……っば、あ！」

先程まで脇腹全体に広がっていた刺激が、一箇所集まって穿ってくる。

くすぐったさに断続性が生まれて、ぴくん、ぴくん、と腹を前に突き出してしまう。

「おやおや。全く効いてない、のでは無かったのですか」

「き、効いてない！ 効いてない、からあ……っ！」

「では何をそんなに悶えているのですか？」

「う……」

咄嗟に何も言い訳が思いつかなくて、黙ってしまう。

「気持ちいいんですよね？ くすぐったくてたまらないんですよね？ お肌敏感のよわよわ退魔師だから、淫魔の責めに喘いじゃうんですよね？」

「ちが——違う、っ！ 私は弱くなんてない！！」

「全身をどろっどろのローションでマッサージされて……手袋で色んな所を触られて……こんな気持ちの悪い尋問なのに、可愛い声あげてるじゃないですか」

「だから……っ！ 違う、って……！」

「そうやって咲那さんが声を上げてるから、弱いところがどんどんバレてしまい、こうやって集中的に責められてるんですよ。ほら、ほら、ほら……っ！ つよーい退魔師さんだったら、我慢して耐えればいいんですよね？ それができないってことは、咲那さんは淫乱のザコ退魔師ってことなんです。普通に考えたら分かりますよね」

「~~~~~ッ！！ お前、絶対に殺してやるからな！？」

私は頭に血が上り、嘔み付くように吠えてしまった。青髪の方へ向かっていこうとしたので、ギシ、とベルトが軋んでいる。

普段の丁寧な言葉遣いさえ——崩れてしまう。

それほどまでに、この身体はローションマッサージで追い詰められていて、心も限界が近かったのだ。

「私のこと何にも知らない癖に、勝手なことを言うなァ！ 私はこれまで、厳しい訓練や沢山の淫魔を倒してきた、誇り高き退魔——ああああッ！？」

「はい、くちゅくちゅー」青髪がさらに激しく脇腹をくすぐってきた。それにより、私は嬌声で台詞を止めてしまう。「またいい声出しましたね。……それで？ 誇り高き……なんでしたっけ？」

「コイツ……ッ！ わざとこのタイミングで……。性格の悪い……！」

私は眼力で相手が殺せそうな程、強く青髪を睨んだ。

しかし青髪は全く臆せず、あっけらかんとしている。

「そんなに睨んだところで、どうにもなりません。我慢ですよ、咲那さん。我慢してご自分の強さを証明しませんと。みっともないですよ」

話しながらも脇腹をくすぐる手を止めてくれない。

「う、ぐ……っ。あ、あんた達がこんなことするから、じゃない……っ！ 正々堂々戦いなさいよ……！ 卑怯者……！」

「こんなこと、って言ってもさあ」背後で赤髪が声を出す。「まだまだ全然だよねえ」

「全然……？」

「そ。ほら、例えば……おっぱいとか。触ってないもんね？」

「え——」

赤髪が手袋を両肩に置いた。

そして胸元を隠しているグレーの薄布の裏側へ——ずぼり、と手を侵入させてくる。

「あ、あう！？」

乳房の上部へと手袋が置かれた。そのまま逆手で、赤髪がむにむにと揉んでくる。

「お、めっちゃいい形してんねー。じゃあ咲那ちゃんのおっぱいに……ローション、塗り込んでいくからねっ」

「や、やめ——」

両手が広がって、その平全体を使っの愛撫が始まった。

ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ、——

「ふうう……っ！ ん、っあ……！？」

私の膨らみに沿って手袋がぴったりと張り付き、表面の毛で擦ってくる。

胸全体をぞわぞわぞわとした感覚が覆い尽くす。

中指を下乳に引っ掛けてそのまま持ち上げ——ぶるん、と離される。「っ、う！」肌が素早く毛と擦られる共に、肉の重みを感じてしまう。

親指と小指の部分で横乳をかすられて、ぴくんと身体を跳ねさせてしまう。「あ、ここ？」と赤髪は嬉しそうに言うと、横乳だけを手袋全体で擦ってきた。「ふぁ、あっ」ぬちぬちぬちぬち……と丁寧に毛を往復させてくる。毛の硬さが敏感な部分を刺激し、思いがけないくすぐったさを生んでいる。ここも弱点だったなんて……！ と私は菌囁みしながら悔しかった。

そして脂肪全体の柔らかさを楽しむように、指を沈み込ませてきた。まずは五指を一つずつ、順番に差し込んでくる。段々と私の胸が変形していき、脂肪の流れる様子が分かる。「っ、く、う……っ！」また全体をがっしりと掴んだ上で、一気にぎゅうっと揉んでくる。「あ、っ！」パッと離して開放し、だぶん、と揺らす。そしてまた掴み、力強く揉みしだく。ローションを奥まで浸透させて、私の胸をもっと淫靡なものにしてやろうという意思を感じる。

「ていうか咲那ちゃん、乳首めっちゃ勃ってるよ。そんなにおっぱい弄って欲しかったの？」

「黙れ……ッ！ こ、これは……生理的な反応、だからっ！ 仕方ないでしょ……っ。こんな風にされたら……誰だって……」

「そうかなあ。普通の人間は、こうやってされても——」

赤髪が、わざとらしく音を立てながら私の胸を撫で回す。

そして掬い上げるように持ち上げ——だぶん、と震わす。

ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ、——

「ん、っあ……！ こ、この……お、っ」

「そんなかわいい声なんてあげないと思うよ？ 咲那ちゃん、もしかして誘ってるのお？」

「そんな訳ないでしょ……！ もう黙りなさいよ……っ！ ホントにいい……」

「じゃあ咲那ちゃんのお誘い通り……乳首も弄ってあげる」

「はぁ！？ だから、そんな誘ってなんて無いのに——」

「ほおら、ちゅこちゅこちゅこ……」

そう言って、赤髪は乳首だけに指先で触れると、小刻みに動かした。

「っああああ……、っ！ 乳首、なんてえ……っ！」

赤髪の中指が、乳首の先端を擦り上げる。

人差し指と薬指で挟み、側面や乳輪を擦り上げる。

胸全体に広がっていた気持ちよさが、その頂点たる弱点へと集中する。そこだけに意識を向けられる。性感がくっきりとした形として現れて、じんじんとした快楽が胸を突いてくる。

「んふふ。そんな風に悶えちゃって……。ここも弱点なんだね。」

筆が糊を塗りつけるみたいに、手袋の毛が執拗に乳首を撫で回してくる。横向きに擦れたり、あるいは毛先がチクチクと刺さったり……。揉みくちゃになっている毛の密集にすっぽりと抑えられてしまい、暴れまわる内部でぐちゃぐちゃと振り回される。四方八方から多様な摩擦感が暴風のようにやってくる。まるで乱暴な咀嚼を受けているみたいだった

女体のシンボル——ツンと出っ張った薄ピンク色の乳首。

恋人にしか晒さない様な箇所を、憎き淫魔の手によって良いようにされているという事実が嫌だった。それも白濁色の媚薬ローションを塗り込められているだなんて……。

「あ、う……っ！ くう……っ！ く、くちゅくちゅしないで……っ、そんなところ……！」

「ざんねーん。もう弱点だってバレちゃったからあ、しーっかり責めるからね。恨むなら、我慢もできないであんあん喘いじゃってる自分のザコっぷりを恨むんだねっ」

「……ッ！ 死ね……っ！ クソ、野郎……ッ」

「あははっ、そんな怖い顔しないでよー。もっと虐めなくなっちゃうからさあ」

「いつまで……こんなことを……っ！ よく飽きもせず、できる、わね……っ。感心するわ、ホントに……っ！ 意味なんて、ないのに……っ！」

「ええー、ホントに意味ないのかなあ？ さっきよりもずっと——感じちゃってるでしょ？ 咲那ちゃん？」



「感じてなんか、ない……っ！　気持ち悪いだけ、だから、あ……っ！」

「ビンビンに勃起させておいて、何イキってんの？　面白いなあ……。こんだけ媚薬吸わされて、ローションを全身に浸透させられて、もう咲那ちゃんは相当感度が上がってるはずだよ。まあ、それなのに口調が強気なままなのは、生意気すぎてウケるけど」

感度が上がっている。

正直、私自身それは分かっていた。

弱い部分に沢山媚薬を擦り込まれて——もう身体ははち切れそうなほど“限界感”を覚えてしまっている。淫紋はうるさいくらいに反応して疼いているし、クリトリスの勃起は止まらないし、膣の奥が濡れているのが分かる。今触られている乳房だって、何かが弾けてしまいそうな感覚にずっと苛まれている。

もうダメかもしれない……。

そんな絶望感さえ、あった。

だけど最後まで抵抗を止めてはダメだ。淫魔達の責めを受け入れてはダメだ。

「ほおら、カリカリカリ……」

赤髪が煽るような口ぶりで、私の乳首を細かく引っ掻き出した。

毛が下から上へと一瞬だけ当たって、ゾリッ、とかする。それを何度も繰り返していた。

「あ、うっ！？　うっ！　っく！」

「こういうのも気持ちいいでしょ？　弄ってもらえて良かったねえ」

「黙れ、クズが……！　今すぐその手を、離せ……！」

「何ですかー？　もっと気持ち良くなりましょうよ」

「だから……っ！　何度も言わせないでよ、っ！　気持ち良くななんて無いの！　気持ち悪いだけ！　ホントに馬鹿なんだから……。……ああ、はいはい。じゃそういうことにしてあげる。気持ちーですよー。愛撫も上手ですねー？　うまいうまい」

「んふ。まだ認めないんだあ……。じゃあ、そろそろ調査を止めて……」言う通り、淫魔達は手を止めた。しばらく振りに手袋の感触が消えて、私は「はあ、……」と疲労の息を漏らす。

「一旦、イかせちゃいましょうか」

「イかせ——は？」

「まだ気持ち良くないんですよね？ だったらまあ……これ以上ないってくらい気持ち良くさせてあげますよ。イキ地獄です」

イキ地獄。

そして私は——、この口をついた軽率な挑発を、後悔することになるのだった。

「っ、あああああ！？！」

大きな嬌声を上げながら私は絶頂に達してしまう。

膣内へ青髪の中指が挿入されている。もちろん手袋ははめたままだ。つまりたっぷりのローションを吸い上げた毛の密集が——内臓たる膣壁の肉を、直接に擦っている。

「はい、またイきましたね」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、……最ッ悪……っ！ ほら、イってあげたんだから、さっさと指抜きなさいよ……っ！」

「いいえ。このまま続行します」

「は——」

ずちゅ、ずちゅ、ずちゅ、ずちゅ、——

上側にあるスポットを狙うよう、指の腹が膣を押し上げるように食い込んでくる。絶頂してぎゅうぎゅうと収縮している穴を、無理矢理押し広げるようにして、ぐりゅっ、と指圧してくる。

「っは、あああ！？ あ、ぐう……っ！」

青髪が指の腹を小刻みに動かしてくる。ずりずりずりと小さな往復をさせる。

「いったばかりの性感帯に媚薬ローション塗りつけられるの、どうですか？ 咲那さん？  
絶頂した上で更に高められていくから……想像を絶する気持ちよさですよ」

「やっ、やゝめゝ……っゝ！ やめなさいゝ……っゝ！！ ……あゝっゝ……！？」

私は拘束台を強く握り締めながら、ぎりぎりど歯を喰いしばって耐えていた。手術然とした青い合成皮革に爪を喰い込ませるほど、強い握力で掴んでしまっている。本当は何でもない風に振る舞って淫魔達に徒労感を与えたかったが、その企みはすぐに瓦解した。

こんなの我慢できるわけない。

ぐつぐつと煮込まれるよう散々に焦らされた上で、肌という肌に媚薬の塗擦を受けてしまった。内側からも外側からも毒に侵されたこの身体は、全体が快楽を享受するためだけの器官に成り果ててしまっているのだ。戦闘のために数多のトレーニングで鍛え上げた筋肉も、練り上げた肢体も、美しいプロポーションも、全て——肉感的なモノへと変換されてしまった。退魔師として、そして伊吹咲那という一人の女性として、これまでの人生でこつこつと積み上げてきた強靱さや誇り高さ。それらが踏み躪られて、今この瞬間の快楽のための布石に過ぎなかったのだと、淫魔の指が教え込んでくる。

「あゝ……っ！ こ、の……！ もう……っ！」

絶頂した直後の膣を手袋で撫で回されると、ギリギリとした性感が込み上げてきて、たちまち身体が追い詰められてしまう。全身を緊張させたまま、身体を浮かすようにして力んでしまう。意識は膣の急所へと強引に向けられる。その肉の表面を、どのように撫でられて、どのように毛がさらり上げ、どれくらい圧迫されているのか、きちんと知覚してしまう。分りたくもない性感をくっきりとしたイメージと共に受け取ってしまう。

「じゃ、そろそろもう一回イきましょうね」

「あ、あぁっ！ や、やだ——」

青髪が指を素早く動かす。より奥へ、より強く、指圧をかけてくる。私の股間の上に溜まった液体がじゃぶじゃぶと飛沫を上げている。

ずちゅずちゅずちゅずちゅずちゅ、——

「……〜〜〜〜ッ、あああああ！！」

びくん、と腰が大きく跳ねる。  
ふしゃあ、と潮が噴き出して青髪の手首へかかった。

「はい、イきましたね。では続けます」

そして絶頂直後のスポットを、ずち、ずち、とまた刺激されてしまう。

「あゝあゝ、もゝおゝおゝおゝ……っ！！ う……っざいなあ！ もういいじゃない！  
何回もいったでしょ！？ いい加減にしてよ、お……っ！」

「いえいえ。これは調査ですよ。たくさんサンプルを採らなければいけません。咲那さんが  
この弱点でどれだけ感じて、どれだけイけるのか、全部記録させて貰いますね」

「ぐう……っ！」

あまりの羞恥に顔を歪めた。個人の性的な事情というプライバシーを暴かれて、敵である  
退魔達に拡散されてしまう。全部分かられてしまう。データとして残ってしまう。

嫌だ、そんなの嫌だ……。  
青髪は指の動きを止めないまま話を続ける。

「ああ、それとも……。情報を提供して下さいますか？ そうすれば、この“調査”も少しは  
手加減してあげてもいいですけど……ッ！」

ぐちゅ、と一際強くスポットを押し上げられる。

「んあゝあゝあゝっ！？」

私はあえなく一瞬で果ててしまう。不意打ちへの驚愕と快楽が混ざり合って、大きい嬌声  
を出してしまう。すぐにパッと口を閉じた。

「ふう、ふう、ふう、ふう……」

どうにか息を整えて、唾を飲み込む。

……もう疲れた……。

正直、身体はとっくに限界であった。幾度もの緊張と弛緩によってもったりとした倦怠感が包んでいるし、べたべたと纏わりつくローションの手触りを感じ続けるのにもうんざりであった。今すぐシャワーを浴びて洗い流したいのが本音だ。このピンク髪だって、どれだけ痛んでしまうか分からない。長髪は手入れが大変なのに。

最も怖いのは“手遅れ”になってしまうことであった。淫紋を刻まれた後は、その疼きによって日常生活にすら支障が出た。今度は全身への媚薬塗り込みによって、もう戻れないくらいに身体がおかしくなってしまうのではないか。そういう不安が頭をもたげている。例えばこの後で仲間の救助が来ても、そのときもう“手遅れ”になっていたなら——退魔師としてはもちろん女子高生としてすら活動できないかもしれない。

淫魔どものせいで私の人生を壊されるかもしれない。

それよりかは、多少の情報でも差し出して、彼女達に媚びた方が賢い選択なのだろう……。……だけど。

「ふ、ふん！ 手加減なんて……もうされてるかと思ったわ。何？ もしかして、もう大分追い詰めてるんじゃないかと思ってた？ 残念だったわね。退魔師のこと舐めすぎよ」

「ふうん。まだまだ、だと？ そう仰りたいんですか」

「と、当然じゃない……。別にイカされるくらい、これまで他の淫魔にも——」

「なるほど。では、別の箇所も同時に責めますね」

青髪はそういうと、もう片方の手を股間に伸ばしてきた。

ぐい、とレオタードを引っ張ってずらす。

「あ……」

思わず声が出た。

ピン、と勃起したクリトリスが露わにされてしまったからだ。

「ここも、ゴシゴシしましょうか」

青髪は親指と人差し指で私のクリトリスを挟むと、上下に動かした。

手袋の毛で、ギンギンに尖った肉豆を思い切り摩擦したのだ。

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこ、——

「うゝ ああああッ！！？」

突如として突き抜けた性感に、大きな声を上げてしまう。

「ここ、弄って欲しかったんですよね？　ずっと勃起させたまま窮屈そうにしてみましたし……。沢山ちゅこちゅこしてあげますからね」

「あああああっ！！」

身体をつんざくような性感。媚薬に浸された女体の急所が、削るように擦り上げられていく。ローションの潤滑によりなめらかに動きながらも、毛の表面によってゾリゾリと硬く刺激される。一往復ごとに生み出される快感量が凄まじい。

「ほら、こっちも忘れないで下さいよ」

そう言って、青髪は膣への責めを再開させた。ようやく落ち着きだしていたスポットが、また乱暴に圧迫されだす。

股間にある二つの急所が同時に擦られて、私は訳が分からなくなってしまう。

「あああああーッゝ！？　やめて、っ！　やめて！！！！　同時に擦らないで！！」

「まだまだ、なのではないですか？　クリ責めを追加されただけで随分騒がしいですね」

「こんなの無理、っ！　無理い……っ！！　……～～～～～ッッ！？！」

ズシン、と突き上げるような絶頂感に見舞われる。

「あ……っ、が……っ！？」

私は下半身をがくがくと震わしながら、その快楽に翻弄されてしまう。ローションが周囲に飛散していく。拘束椅子が愛液で濡れていく。

「絶頂中ですが続けます」

悪魔のような言葉を発して、青髪は更に強く責め立ててきた。

「ん` あ` あ` あ` ……っ` ！？ だ——ダメ！！ 今イッてるからあ！！」

ビクビクと痙攣する肉豆を抑えつけて、絶頂に打ち震える表面をさらに手袋で擦っていく。毛を快楽神経へ直接なすりつけ、泣きたくするような感覚を叩きつけてくる。

「触るなって……ばあ！ この……っ！ この、この、この……ッ！！ クソがあ…  
…！」

苛立ちによって、激しく身体を暴れさせる。L字の拘束椅子を壊してやろうともがく。ベルトを引きちぎってやろうと力を込める。

だけどそんなことは到底無理で、ただ股間が弄られるのを受け入れるしかないのだ。

「お口が悪いですよ。ほら、お仕置きです。ちゅこちゅこちゅこ——」

「う` あああああっ！？」

びくん、とまたイカされてしまう。

盛大に潮を吹き漏らしながら、背を弓なりに反ってしまう。

「あ……っ、う……っ！」

それでもまだ、青髪は手を止めない。

「……っ、ああああああ！！ なんで、また……っ！？」

辛くてぎゅっと目を瞑ってしまう。イヤイヤをするみたいに腰を振ってしまう。

青髪はしつこくクリトリスを扱き上げ、膣を指圧してくる。絶頂中のそれらを力任せに刺激していく。

私は既に限界の様相を呈していた。これ以上は無理だ、これ以上は無理だ、と何度も頭のなかで反復していた。

そんなとき——、

「てか咲那ちゃん、こっちも忘れないで欲しーなあ」

赤髪が笑いながら、また胸部分の衣装へ手袋を突っ込んでくる。  
ぞわぞわと乳房を毛で擦りながら——頂点である乳首へと到達する。  
ぎゅう、と強くつねられた。

「んああっ、う！」

それだけで私は達してしまった。  
逃げるように上半身を前に出してしまう。ベルトに強く厄されてしまう。

「うわあ、乳首よっわ。咲那ちゃんの弱点はここなんだねー。いいよ、いっぱい乳首イキしようね？」

赤髪が人差し指で乳輪をなぞってくる。白い乳房の中央で、色を濃くしている性感帯——その円周にずるずると毛を押し当てられる。

「や、だあ……っ！」

その大きさや形を確かめるような手付きに、否応なく意識させられる。今からここを犯すのだ、と焦らされているようだった。私の意識や疼きといった薄暗い“期待”が高まってしまう程、それから受け取る気持ちよさは際限なく膨らんでしまうもので——、

ぐに、ぐに、ぐに、と乳首を捏ねられだす。

「んやあああつ……！」

根本を掴んでぐりぐりと動かされる。先端が合わせてふるふると揺れている。ここがお前の恥ずかしいところだ、と強調されているようで嫌だった。

そして先端を、ぎゅちっ、と潰される。そのまま指の腹を左右へ動かし、乳首が転がされた。指圧の強さと毛の柔らかさが複雑な快感を起こしている。ぷちぷちと泡が弾けるように小さな絶頂が何度も発生した。

「あ、イッ……、ぐ……っ！？」

そうして何度か跳ねさせられた後は、毛先で優しく撫でられ出す。こそばゆさに焦らされる。飴へ蜜を塗りたいように丁寧で微かな力加減である。ぐりゅん、と進行方向を変える度、毛先が乳首をほじくるみたいに立ち上がる。それを繰り返していくとローションが乳首



を包んでいき、全体でヌメリ気を感じさせられる。

そのように下拵えをされてから、また摘まれてすり潰される。か弱く変形させられた乳首から白い性感がパチパチと発生し、私の乳房を満たしていく。

食いしばった歯の内側から、「ふ……、く……っ」と声が出てしまう。両乳首から別々に絶頂が這い上がってくるので、どのように身構えたら良いのか分からない。

胸を隠したくて肩を丸めようとしても、手首のベルトが許してくれない。そして胸に手をあてがっている赤髪が、“気をつけ”させるみたいに後ろへ引っ張ってくる。背中が拘束椅子へくっつく。すると前面へピンと乳房を張ってしまうため、弱点を大きく晒しているような格好をとってしまうのだった。

そこへ手袋が纏わりついて、咀嚼するように乳首を揉みくちゃにしてくる。ぬちゃぬちゃと音を立てながら、何度も絶頂を促してくる。

「そんな、何度も……っ。ねちねちと……っ！ しつこい……っ！！ っ、あ……！」

——どうして。どうして私は反応してしまうのだろう。

強い心さえあれば、どんな酷い目にあっても気高く振る舞えると思っていた。例え敗北してしまっても、淫紋を刻まれても、そんなことには屈せず前へと進んでいけば高潔さは保たれると思っていた。

けれど肉体が心を蝕んで、確実に傷を与えてくる。

乳首で絶頂が弾ける度に、女体のシンボルが汚されていく。私は乳首で絶頂を迎えてしまうような身体になっているのだと分からせられる。否定したくても、開発されてしまった事実がそこにはあった。

膣が擦られて重たい絶頂を感じる度に、上げたくもない嬌声が絞り出される。ほら、また我慢できなかった、と思い知る。プライドが肉体的な反応によって貶められているのだ。奥まで響く絶頂は淫紋へと接続されて、じくじくとした痒みと化して発現していた。痒い。今すぐ下腹部を掻きむしりたい。そして熱い。体温が更に上げられていく。脳がゆだって、まともな思考ができない。

いったばかりのクリトリスが扱かれる度に、ツライ性感に訳が分からなくなってしまう。淫魔どもの前だというのに、苦しそうに眼を固く閉じ、唇を噛み、長髪を振り乱しながら、口の端から涎を垂らしてしまう。本当は普段のクールさをずっと装っていたい。そうやって、淫魔なんかの責めに退魔師は屈しないのだと態度で示したい。

けれどできない。圧倒的な性感の前に、ただギリギリの状態で耐え忍ぶことだけが精一杯だ。

傷の蓄積は、やがて音を立てながら心を折っていくような気がした。

自分がこんな目に合っていることへ強い理不尽感を覚えて、もう楽になった方がいいんじゃないか、なんて考える。

同時に——情報を渡してしまった方が、むしろツライ思いをするかも、とも考える。私は心身共に淫魔の嫌らしい責めに屈服し、退魔師の誇りと共に仲間達を売ったのだ。そういうスティグマが一生ものとして刻まれてしまう。

どれだけ、どれだけイカされようとも——心までは屈するな。  
頑張れ、頑張れ咲那……。

——ぴゅくん

迸るような感覚がした。

見ると、衣装のなかで——乳首の先端から白い液体がたらたらと溢れている。

「あらあ……」

赤髪が嬉しそうな声をあげた。背後から私の肩に顎を乗せて、性格の悪い口調で囁いてくる。

「これ、なんだろうね。……ねえ？」

ぎゅう、と乳首の根本がつねられる。

「っ、ああ……っ！」

私の声に合わせて、乳首の先端からまた液体が飛び出してきた。衣装を内側から濡らして、円形のシミを作ってしまう。

「咲那ちゃん……とうとう霊力をお漏らしちゃったんだねえ」

「う……。う、あ……ああ……っ」

ずき、ずき、と淫紋が反応している。霊力を放出する度に快感を覚えてしまう効果が付けられているのだ。

「ふーっ」可愛がるように耳へ息を吹きかけられる。「ねえ、この霊力……私達にくれるってこと？　ありがとお」

「なるほど」青髪が見上げてきて、頷いた。「乳房からの搾乳……。そういう方法で霊力を

吸い取ることができるんですね。また一つ勉強になりました」

「助かるよ咲那ちゃん。咲那ちゃんの身体が嫌らしいおかげで、素晴らしい発見ができましたー」

「嘘……嘘だ……。そんな、胸から、霊力なんて……」

「嘘じゃないよ。早く認めよ？ ——ほら」

赤髪が、がしっと両乳房を掴んだ。

ぐに、と指を食い込ませて変形させる。それだけでも、じくじくと乳房の内側で乳腺が反応しているのが分かる。

そして搾乳するように、乳首に向かって手の輪っかを走らせる。ぞりぞりぞり、と毛が乳房を擦っていく。どくどくと何かが胸のなかを流動的に蠢く。そんなおぞましい感覚を覚えて——。

ぐち、と乳首が潰された。

びゆく、びゆく、と母乳となった霊力が噴き出される。衣装の裏生地当たり、染み込んでいく。あるいは下乳の方へと流れていき、丸みを伝って筋を作り、お腹へと垂れていくのだった。レオタードの裏側がじんわりと温くなる。

「あ、う` う` う` ……っ` ！！」

「びゅっびゅしちゃったねえ」

「もお……いや……！」

「先程より量が増えたような気がします。……ああ、成程」

青髪が何かに納得したような声を出してから、膣と陰核への責めを激しくした。

「んああああっ！！？」

「こうや……って、イかせてあげると——」

霊力を出したことによりまたもや感度が上がり、膣と陰核での性感が一層厳しいものとなっている。

愛液を掻き出すような、また小さな肉豆を削ってしまうような、乱暴な手付きで責められて——即座に絶頂を迎えてしまう。

「ああああううっ！！」

すると、潮を吹くのと同時に乳首から霊力が溢れてきた。

「ああー、そういうこと。イかせればそれだけ霊力お漏らしするのね。うわあ、もうホントに淫乱じゃん。咲那ちゃん」

「うう……」

この身体が憎くてたまらない。どうして私の尊厳を貶めるような機能をしてしまうのだ。乳首から霊力噴き出すなんて——あまりにも情けなさすぎる。どう格好つけたところで意味ないじゃないか。更には霊力が逆るのに合わせて、軽イキも起こしてしまっている。外的な刺激によって無理矢理引き起こされたのではない、自発的な絶頂だ。

もう一滴も出したくない……。

視界の奥で、緑髪が立ち上がる。  
そして棚を開けると、なかから巨大な瓶を取り出した。  
抱えるようにしてそれを持ってきて、青髪に渡す。

「……ええ。そのくらいは頂きませんか」

「な、何……。何する気……？」

「サンプルです。乳首から得た液状の霊力が、どういったものなのか調査しなければいけませんからね。咲那さんからたっぷりとサンプルを採らせて頂きますよ」

嘘でしょ……？

さっき一回いったのでは、片手で抱えるくらいだったのに……。

二リットルはありそうな瓶を満たすなんて、そんなの、あと何回乳首イキすればいいっていうの……？

「どうしたんですか？ そんなに顔を引きつらせて……」

「ま、待ちなさい。そんなの無理に決まってるでしょ……！ 普通に考えて、無理だって…  
…。おかしくなるって……！」

「“そこいらの退魔師とは違う”。——そう仰ったのはあなたでは？ でしたら、普通を超えた度合いの責めを受けても、大丈夫ってことですよね」

「あ……あ……」

私は自身が発した言葉を挙げられて、何も言い返せなくなる。

今更「ごめんなさい、強がっていました」と謝ることなんてできない。

ただ発言の責任として——責めを受け止めるしか無いのだ。

「じゃあ……」赤髪が乳首に指を添える。手袋の毛がゾワリと撫で上げて、イキ疲れた乳首を無理矢理に勃たせた。「……イキ地獄、頑張ってるね！ つよつよ退魔師の咲那ちゃん！」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、ぜえ、……」

気が遠くなるような時間を経て、ようやく瓶は満タンに溜まった。しばらくぶりに乳首が手袋から開放されて、外気に晒される。室内に滞留しているガスの生暖かさを感じる。すっかり搾り取られたそれは、ピクピクとわなないていた。絶頂の余韻がまだ胸全体に響いている。幻痛のように、赤髪の執拗な手付きが乳首の表面に残っている。

私は喉をヒリつかせながら荒い呼吸を繰り返し、満身創痍といった状態でがっくりと項垂れていた。顔中を汗が伝って、ぽたぽたと眼下の太腿へ落ちていく。それだけは冷たくて気持ち良い。だけど視界には、そそり立ったクリトリスや、未だにくばくぽと収集している膣が映り込んでしまう。それが私の身体だと認めたくなくて、せめてもの抵抗に目を閉じる。

「それ、運んでおいて下さい」

青髪が緑髪に指示をした。緑髪は瓶を持つと、白衣を翻して室外へと持っていく。  
ちゃぽん、と瓶のなかから水音がする。  
私は思わず見上げた。あれが全部、私の霊力……。そして乳首イキの証拠……。  
それらを全て、淫魔達に渡してしまったなんて。  
……いや、まだ渡していないものがある。

「さて、咲那さん。そろそろ話す気になりましたか？ 有益な情報を……」

「こんだけ気持ち良くしてあげたんだからさー、お礼にちょっとくらい話してくれてもいいじゃんね。それとも、まだ足りないのかなあ……？」

「……」

ぐらり、と自分の心が揺れるのが分かる。  
相次ぐ調査という名の陵辱や、長時間に及ぶ乳首での連続絶頂……。さすがの私にもかなり堪えるものがあつた。  
現に、まだ身体の内側では絶頂の余波がじくじくと性感帯を苛んでいる。淫紋と共鳴し合うせいか、なかなか発散されていかない。  
ここまで耐えたんだ。ここまで耐えたんだから、もう――。

「もう――あんた達の底が知れたわね……！」

「ほう」青髪が感心した様な声をあげた。

「わ、私はここまで耐えることができた。だったら、後はそれを繰り返すだけ。……長々とご苦労様だったわね。一生懸命に乳首搾って、ちまちまと霊力を集めて……バッカミたい」話し始めると勢いがついてきた。散々罵られたことへの憎しみも相まって、思いつく限りの挑発を述べてしまう。「私に淫紋を刻んだヤツはその程度じゃなかったわよ。ああ、そっか。あんた達、そんな女医みたいな格好してるけど……淫魔のなかでは低級なんでしょ？ だから直接戦闘には関わらず、こうやって無力化した退魔師だけ相手にしてるのね？ あらあら、それで尋問も失敗しちゃうとか……。いよいよ取り柄が無いじゃない！ いいわよ、好きなだけあんた達の研究――じゃなかった、“お遊戯”に付き合っただけよ」

「お遊戯、と来ましたか……」青髪が、やれやれ、と首をすくめた。「手厳しい」

「当然じゃない。快感やくすぐったさで、ほ、本当に人間の心がどうにかなるとでも？」

少し言葉が引っかかってしまった。

それは不信の現れだ。

「まだ分かりません。なにせ、あなたの一番の弱点をまだ調査していませんから」

「え……一番の弱点？」

「はい。もしかして、隠せているおつもりでしたか？ 胸や二の腕を愛撫する際に、かする度にピクピク反応して教えて下さったじゃないですか」

「ここでしょお？」

赤髪が、私の閉じた脇へ——ツプ、と指を挿し込んだ。

「ふ、ああっ！？」

ゾワッと搔痒感が広がって、反射的に声を出してしまう。

「ほら、やっぱり。咲那ちゃんは脇が弱点なんだよねえ？」

な……なんで。

脇を閉じた姿勢だったから、隠せると思ったのに。

反応しないようにずっと意識してたのに。

「ふ……ふん！ 脇が弱点？ 何言ってるの、全く……」

「そうやって必死に隠そうとするの、可愛いねえ」

淫魔の小言にイラッと頭が熱くなる。

そしてまた、私は余計なことを言ってしまうのだった。

「だったら確かめてみればいいでしょ！？ いくらでも調査しなさいよ！」

「おや、わざわざ許可まで頂けるなんて光栄です。では……脇への集中責め、始めましょうか」

拘束の体勢を変えられた。

まずL拘束椅子の背もたれの部分が、三倍くらいに伸びる。そして両手をバンザイするように頭上へ伸ばされて、背もたれの上の方についているベルトに手首を通された。同様に、関節部分と二の腕にもベルトが巻かれて、嚴重に固定されてしまう。これにより、私は脇を大きく晒した姿勢になってしまった。

「っ……！」

これまで沢山の陵辱を受けても尚、この体勢は恥ずかしかった。普段は衣装の奥に隠して、閉じたままとなっている箇所。体臭やら汗やらが溜まる秘部。手入れの欠かせぬ私のプライベートな部分。

そして——正真正銘の弱点。

かつて別の淫魔に嫌というほど開発されて、すっかり出来上がってしまった。

あんな啖呵を切ってしまったけれど……。実際のところ、ただ肌に受けるだけで悶絶モノだったというのに、一番の弱点にあれをされたら……。

私は恐怖を抑え込んで、必死に震えを止めていた。

「わあ、やらしー格好だね。脇をおっぴろげて……」

赤髪が鼻を近づけてきて、スンと短く嗅いだ。

「わ……。匂いやばあ……」

「うる、さい……っ！ 言わなくていいでしょ……っ、そういうこと……！」

キッ、と睨み返す。しかし脇がかなり蒸れていることが事実であると、感覚で理解できていた。ガスに蒸されたため全身が汗だくになっており、特に発汗する箇所である脇の内部は、身じろぐだけで「くちゅ」と音が鳴ってしまうほど汗溜まりになっていた。更には例のローションが肩から垂れてきては、奥まった部分へツルツルと流れていき、肌に張り付いてとまってしまう。そのように湿度の高いスポットとなったまま、じつくりと焦らされていたのだ。

当然、媚薬もたっぷりと染み込んでしまっている。



「では」青髪が手袋をはめ直すと、赤髪の代わりに背後に立った。私はいつ触られてしまうのか分からない恐怖に支配される。「——始めましょう」

「いゝやゝあゝあゝあゝっゝ！！！」

人差し指が脇の柔らかい部分へとあてがわれ、くちゅくちゅと音を立てながら動いている。毛が表面に触れているだけでたまらない痒さを覚えてしまうのに、赤髪は指を脇の奥へと進めてくる。まるで小さな蛇がその頭を振り乱しながら、どうにか秘部の内部へと潜り込もうとしているようだった。私はそれを嫌がって上半身を反対方向へ避けようとする。しかしそちらからも指が挿し込まれているので、自らの行動によって脇の奥へと案内してしまう。その自滅的な行動はとても馬鹿みたいで、私はすぐさま舌を打って誤魔化した。そして左右どちらへも逃げられないと分かると、猫のようにその場で伸び上がり、身体を細くするよう努めるしかない。だが中央への逃げはすぐに限界が訪れて、赤髪の焦らすように緩慢な指が徐々に近づいてきてしまう。どうせ私がどこへも行けないのを知っていて、獲物を捉えた蛇の如く、じりじりと肉薄して——。

——ぐちゅ。

「あゝ、っ！？ うゝうゝうううっ！！！」

両脇へと挿入される。そして関節を素早く動かして、指の腹で脇肉を擦りだす。「んやあ、あぁっ！」脇の部分は骨や筋肉も無くただ窪んでいる。可動を緩やかにするための“余白”として機能する肉が窪みを満たし、二の腕に隠れるようこっそり実っているのだ。よって指を突っ込めば——むにぃ、と沈んでいく。そうして出来た“穴”のなかをほじくると、指は一点的な責めを行ってくる。その感覚の強烈さに、私はますます身体を細くしようとする。肩甲骨を近づけていく。それを追って指は更に距離を縮めてくる。やがて力尽き、身体が元の姿勢に戻ると、内側へと来すぎていた指が奥深くまでズブりと刺さってしまう。「あゝ、っゝ！？」弱点へと強く穿たれて、私は思わず濁った声を出した。そして結局は自滅的に苦しんでしまっているのだと分かって、情けない思いで一杯になった。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ、——

「あ、がっ……！ わ、脇止めて……、止めなさい……ッ！」

「凄い反応だねえ、咲那ちゃん。ここが弱点ですって言ってみな？ 私は脇が性感帯の嫌らしい退魔師です、って」

「クソ、が……っ！ こ、この変態！ 変態ども！ お、女の脇虐めて何が楽しいの！？ せ、性感帯だなんて、バカみたい……っ！」

「え？ 性感帯でしょ？ だってほら……こうやって滅茶苦茶にくすぐったらさあ——」

そう言って、赤髪は五指全てを脇へと当ててきた。

「~~~~~ッッ！？」

全ての指が高速に動きながら、脇の表面をかすめてくる。装飾された毛がぞわりぞわりと擦り上げてくる。それが同時に5箇所、両側で計10箇所もの個別で蠢いているのだ。すっかり開発されている脇は敏感で、毛の一本がずると通り抜ける様子さえ分かってしまう。まるで攪拌でもされているかのようなようだった。動き回る沢山の毛によって揉みくちにされ、暴れ回るような触感に翻弄される。バチバチと電気が走り抜けるみたいにくすぐったさが破裂している。

何これ何これ何これ何これ……！？ くすぐったすぎる……！ 処理しきれない！ 何も分からない！

理性の防波堤を容易く崩壊させて、脇の感覚と肉体の反応が直結してしまう。

私は盛んに嬌声を上げながら、拘束のなかで暴れまわった。微動だにしない拘束椅子の上で、ベルトを引きちぎらんばかりに身体を跳ねさせる。逃げられないことなど分かっている。今更こんなみっともない真似したくない。だけど！ 身体が言うことを聞かない！ 悶絶するしかないなんて……！

「~~~~~ッ！！ 離せ！ 離せよ！！ 早く離せって！！ ねえ！！ 離せって言ってるでしょ！？」

「口が悪いよお、咲那ちゃん。悪い子には……お仕置き。えいっ！」

掛け声と共に、赤髪が脇を思い切り掴んできた。

ぐじゅう、と手の平全体の毛がべったりと脇に張り付いてくる。

「ッ、あああああっ?!？」

瞬間、くすぐったさが飛躍して——私は絶頂を迎えてしまった。

「……あは。イっちゃったね……？」

そう言われて、ああイってしまったのか、とようやく理解する。

脇がジンジンとして、内側に熱っぽいものを感じる。まるで中イキしたときの膣みたい……。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、……な、なんなの……。脇で、イク……？」

青髪が応える。「……アイスを食べ過ぎたら頭がキーンってしますよね。それと同じです。過度な冷たさが痛みへと変容するように、咲那さんの開発された脇で発生したくすぐったさが強すぎて、性感へと変容したんです。それもただのトリガーとしてではなく、本当にそのまま脇でいったのです」

「そう」赤髪が小馬鹿にするように笑う。「脇イキしたのっ」

私は言葉を失った。

……脇なんて、特別でもなんでも無い肉体の一部のはず。それを性感帯にされることすら屈辱的で恥ずべきことだったのに……。

絶頂すら、するようになってしまったのか？

「う、嘘よ……！」認めるわけにはいかない。「今のは……、そう！　ただ筋肉がビクンってなっただけ。別に感じてなんか無いから！　ほんっと淫魔の発想って気持ち悪いわね！　脇でイクなんて、馬鹿げてる」

「じゃあ教えてあげるよ」赤髪がまた手袋を脇に添えた。「イったばかりの脇、直後責めしてあげるね？」

——ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ——

「んがあゝ あゝ あゝ あゝ あゝ っゝ ！？！」

突如として襲い来た想像を絶するくすぐったさに、私は動物の様な咆哮を上げてしまう。絶頂直後の性感帯は、その余波で神経が剥き出しになっている。優しく撫でるだけで我慢

のならない感覚がする。そこへ先程私をイかせた責めが、容赦なく加えられる。

「こ——これダメっ！？　こ`れ`だ`め`え`え`え`っ`！！　とってとってとってとって手袋とって！！！」

「じゃあ認めましょうねー。私は脇でイっちゃうよわよわ退魔師なんですーって」

プライドなんて欠片も残っていないような状況。

それでも私の心は折れずに、羞恥やら高潔さやらを主張してくる。

「み、認めない……ッ！　絶対認めない！！　認めない`い`い`い`い`っ`」

「だったらもーっと教えないとねっ。ほーら、ここほじくられたら——今ヤバいでしょ」

赤髪が人差し指による一点責めを与えてくる。

「————ッ！！　————ッ！！？」

神経の尖った脇肉の、特に弱い部分を探し当てると、そこだけをぐちぐちと弄ってくる。私は熱湯でもかけられたみたいに飛び上がり、燃えるようにすぐったさに悶絶した。手首と腕に付いたベルトをうるさく鳴らし、ガンガンと後頭部を椅子へ打ち付ける。そうやってどうにかくすぐったさを紛らわせようとしても、絶対にこの感覚からは逃れられない。人間にそのような機能があることすら恨むようになってきた。

そして、

「あ、ぐ……ッ！！　ク、ソ、が……っ！」

ビクン、と一際大きく痙攣してしまう。

またいったんだ……と絶望する。

脇がおかしくなっている。熱くて、溶けてしまっているみたいで、私の知覚全てを支配している。私の根幹のようなものがそこから漏れてしまい、好き勝手に遊ばれている。見せたくもない痴態を強制させられ、イきたくもない脇をくすぐられる。女性としての尊厳を何度も踏み躪られ、その様子をせせら笑われる。拒否権も逃げ場もない。ただその恥辱を受け入れて、ただ憎しみに震えるだけ。

くすぐったさに絶叫するだけ——。

「ほら休んじゃダメですよー」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ、――

電源が入ったように、再び私の身体が振り回されだす。

「あゝ あゝ あゝ あゝ もゝ おゝ おゝ おゝ っゝ っゝ !! 死ねッ!! 死ねよ!! クソ淫魔どもが!!」

「うわ最悪ー。そんなこと言わないでよー」

「こんなことして何が楽しいの!? 私のこと虐めたってどうにもならないでしょ!? 情報は吐かないって……ずっと、言ってるのにい……! このクズ! クズ! クズ!」

性感と脇への認識で一杯になった頭では、罵倒する言葉を考える余裕すらない。幼稚な語彙を口汚く発するだけだ。

どれだけ罵倒しても淫魔達は全く意に介さない。むしろ楽しんでいる。私が必死になってあーだこーだ言う様子すら面白いのだろう。それを分かっているが、罵倒は止められない。何故ならすぐったさによって蓄積される爆発的な苛立ちをどうにも消化できないからだ。ただ黙って受け止めていたらプツンと糸が切れて気が狂ってしまう。何かそれ以外のことに縋って、この正気を保たなければならない。

「また、イグ、うゝ ……っ!!」

「あはは! イくって言ってんじゃん!」

「だ――黙れッ!!」口を滑らした。死ぬほど恥ずかしい。「黙れ黙れ黙れ!!」首を振り回しながら喚き散らすように私は叫ぶ。「あ、あんたらはどこまでも……っ、下劣で、下等で、気色の悪い生き物なのね……! こういうことしか考えらんないなんて……、ほんと可哀想だわ……っ!」

「はいはい」

ぐちゅ、と手の平に脇肉を持ち上げられる。限界状態の性感帯が引きずり出され、毛によって掌握される。すっぽりと包まれる。

「う` う` う` う` ……っ` !!」

またもや再開した脇責めの衝撃に、私は真っ赤な顔を歪めた。ギリギリと歯を強く噛み締め、ふうーっ、ふうーっ、と鼻息を荒くしてしまう。汗がだくだくと顔中を流れていく。胸の谷間へ溜まっていく。

掴まれた部分が、マッサージのように捏ねられだした。まるで鶏肉なんかに塩でも揉み込むように、手袋に染みたローションをなすりつけてくる。限界を迎えさせられて無防備になった脇へ、ここぞとばかりに染み込ませられる。毛が脅迫的に何度も往復してきて、脇を一切休ませてくれない。ほら、ほら、ほら、と撫で回してくる。びくん、びくん、と情けなく反応してしまう表面へ、媚薬は浸透していく。じわじわと湿っぽい感覚が分かった。ふと目を向けてみると、白濁色の液体が垂れて脇腹へと落ちていく光景が見えた。擦り付けられている量が多すぎるようにも多かった。

「も` う` ゴ` こ` さ` わ` ん` な` い` で` っ` っ` !!` ね` え` え` え` え` !!」

「咲那ちゃん、なーんかさつきからキャラ違くない？ いや……余裕がなくて、“そのまんま”が出ちゃってるのかなあ？ 取り繕えないくらいギリギリなんだねえ」

「もう、しつこい……っ！ しつこいんだよ……お！ 何度も何度も、脇ばかりい……！ ほ、ほら——私の大事なところ、また猿みたいに弄ったら？」

痴女のような言葉であったが、これ以上脇を責められるくらいなら膣をいじられた方がマシだとさえ思えた。純粋な性感とは違い、くすぐりには際限がない。区切り目がない。ただひたすらに苦痛が続いて、別の刺激として絶頂が訪れる。絶え間なく電流を流されているみたいだ。

「うーん。そこはもう調査したし、いいかなあ」

「だ、だったら！ 脇の調査もさっさと終わらせなさいよ……っ！」

「んふー。それはあ……、まだまだ、だねえ」

「まだまだ、って——」

「3時間くらいは続けよっか！」

——3時間。

1秒ごとに発狂しそうなのに、これをあと3時間！？

そんなの無理だ。絶対に壊れる。は——早く逃げなきゃ。いや、逃げられないことはもう分かっている。じゃあどうするの？ 私は何をすればいいの？ 本当にただ3時間地獄を味わい続けるしかないの？ 何で、何でそんな目に合わなきゃいけないの？ 誰か助けてよ——。

「嫌ああああっ！！ そんなの無理！ 絶対無理！ 頭おかしいんじゃないの！？ 何考えてるの！？」

「咲那ちゃんって強いんでしょ？ だったら耐えられるよねえ？」

手袋が、その全体を口のようにして、脇を大きくしゃぶっている。唇がすっぽりと覆い尽くして、もぐもぐと咀嚼しながら舐め上げている。汗が噴き出し媚薬が馴染んだ脇肉を丁寧に余すところ無く味わって、口のなかで転がすように弄ばれる。

こんもりと薄く盛り上がった私の急所。可動のための余分さが厚みとなって段をなしている。その隙間からたらたらとローションが零れ落ちていく。興奮した膣が愛液を分泌するように、嫌らしい液体が糸を引いている。そこへ人差し指を挿し込まれると、つぷつぷと小さな泡を立てながら、吸着するように凹んでしまう。

そこは重要な血管や神経が真下に通う、人体にとっての泣き所である。本来、決して他者へ許してはいけぬ。そのため触られ続けると、肉体は持ち主に“くすぐったさ”というペナルティを与える。すぐにそこを守れ、逃げろ、と本能的な警告を発するのだ。故に人はすぐに脇を隠すことができる。

しかし拘束によって固定され、淫魔の手で延々と責められてしまえば——肉体の罰に終わりが来ることはない。守らなきゃいけないのは分かっている。ここが弱点なのも知っている。けどどうしようもない。自分の意思では苦痛から免れることができない。

横隔膜が引きつって痛い。腹筋が締め上げられているようだ。勝手に喉からまろび出る嬌声で、呼吸すらままならない。酸素が不足して視界がどんどんと狭窄していく。世界の情報が薄れていく度、そこには脇の感覚だけが取り残される。くすぐったさがくっきりと表れる。

過度な感覚を流し込まれて、両脇がまた無理矢理に絶頂を迎えさせられる。

「んぐううううッッ！！ ……——はあ、はあ、はあ、……いい加減にしてよっっ！！ クソ淫魔が！！ わたっ、私がどれだけツライか分かってんの！？ 殺すつもりならさっさと殺しなさいよ！！」

「殺しなんてしませんよー。咲那ちゃんにはあ、ずーっと脇イキしてもらいますからねえ」

「ふざけるなあああっ！！ そんなこと、誰がするかっ！！ 早く解放しろ！ 早く！！ 聞こえてんのかよ、おい！ ……ろ、ろくに戦えもしないザコだからって、こんな卑怯な手で——あがあああっ！？」

「はあーい。口の悪い咲那ちゃんにはあ、キツイ直後責めで反省してもらいまーす」

「わゝ ……っ、きゝ が……ッ！ こゝ わゝ、れゝ るゝ、……っゝ！！ 絶対、おかしく、なる……っゝ！ から、……ああああ！！」

脇を隠したい。脇を逃したい。満足に反応することすらさせて貰えない。腕も足もお腹も食い込む程に縛り上げて、ただくすぐったさを受け止めることしか許してくれない。脳が焼ききれそうだ。時間感覚が完全に狂っている。前後不覚に陥っている。早く終わって、早く終わって、早く終わって、お願いお願いお願いお願い——。

こんだけ人間が叫んでいたら、誰だって少しくらいは躊躇するだろう。本当に発狂するんじゃないか、死んでしまうんじゃないか、色んな怯えが起こって手を緩めるはずだ。だけど淫魔は、私がどれだけ絶叫しようとも過酷さを訴えようとも、うんうんと流すように頷きながら微笑むだけで、手袋の動きは決して止めない。硬い毛による摩擦を淡々と叩きつけてくる。——私はゾッと背筋が凍った。こいつらはやはり異常だ。もしかして、このまま私が本当に壊れてしまっても、いいと思ってるんじゃないか……？ だったら、これから私に与えられるくすぐったさに上限なんて無いんじゃないか……？

誰にも気づかれず、どこへも行けず、脇の苦痛だけを覚え続ける無限地獄——。

「う、うう……」

ダメだ、考えるな。あまりの絶望感に泣いてしまいそうだ。

涙は見せるな。身体がどれだけ追い詰められても、最後の心だけは……！

「こーゆーのはどうかなあ？」

赤髪が、手の平全体をべちゃあと脇へ押し付けた。毛が肌の表面へ満遍なくくつつく。「っ、ひゃっ！？」それだけで私は軽イキのような跳ね上がり方をしてしまう。

「はい、ごしごしごしー」



そして上下に大きく往復させだした。こびりついた汗をこそぎ落とすように、性感の神経を守る最後の防波堤を崩すように、荒々しく洗われる。毛の繊維が硬く引っかかり、ローションの潤滑が舐めあげたりしてくる。

「もう嫌ッッ！！　もう嫌アーーーーーッッ！！」

私は不規則に身体を痙攣させながら、両脇から濁流の如く流れ込んできくすぐったさにぶん殴られた。眼の奥がチカチカする。頭が熱い。心臓が鼓動を早める。全身の筋肉がひきつっている。カタカタ、カタカタ、と意図的には出来ないようなリズムで身体が飛び上がっている。股間からは潮まで噴き出していて、衣装の乳首部分は漏れ出した霊力で丸く湿っている。

高速ブラッシングの手付きから底知れぬ悪意を感じる。私のことを泣き叫ぶ玩具のようにしか思っていないのが分かる。苛烈な刺激が切れ目なく与えられて、先程からずっと脇イキを繰り返している。白い閃光となって弾けるようなくすぐったさの最高潮。それが何度も、パチン、パチン、パチン、と訪れる。電気スイッチを無茶苦茶に動かしているみたいに、イって、イって、イって、イク。それだけくすぐったさは強烈で執拗だった。振り切った苦痛から降りることができない。

「~~~~~ッッ！！」

「凄い表情だねえ。女子高生がそんな顔していいのー？」

「こ、殺す……ッ！！　絶対に殺す……ッ！！」

「これツライ？　もう嫌？　止めて欲しい？」

「さっさと、止めろ……ッッ！！」

「もー、口悪すぎ。……そうだ、もう塞いじゃおっか！　ね？　どうせまだ情報くれないだろうし」

と言って、赤髪は手を止めた。

そして一つの瓶とベルトを用意して、私の前に掲げる。瓶の中身は濃いピンク色で満たされており、中央では布が浮かんでいる。

……口を塞ぐ？

どうしてそんな残酷なことを思いつくんだ……？

「ひ、ひい……っ！」

「うん？ やっぱ怖い？ これから何をされてもどんなに苦しくても、何も干渉できなくなっちゃうってのはあ」

「だ、ダメよ……。そんなことしたら、絶対に……！」

「じゃあさー、もう分かってると思うけど——。情報、ちょうだい？」

——情報。

それさえ差し出せば、最悪だけは免れる。

もう十分じゃないか。そうだ、まだ助けに来ない仲間達が悪いんだ。私は精一杯戦った。これ以上は無理だ。

……だけど、私は、

退魔師、だから……。

「……そんなもの、無いわ」

「え？」

「あなた達に渡す情報なんて、無いって言ってんの」

ぷっ、と私は唾を吐いた。

唾液が赤髪の額へ飛ぶ。

すると彼女は、怒りもせずにニヤアと最上級の笑いを見せた。

「んんん〜！！　ほんっとに生意気で、強い子！　でもね、だからこうやって……とことん苛め抜かれちゃうんだよお。……さ、お口塞ごうねえー？」

「……や、やだ、止めて、嫌——んぐう！？」

手の空いていた青髪が、私の口腔へ布を詰め込んだ。媚薬がたっぷり染み込んだ布は、甘ったるくて気持ちの悪い味を主張しながら、舌の上を満たした。

そして口周りを太いベルトのようなもので巻かれる。こうして私は、言葉どころかろくな呻き声すら上げられなくなってしまった。

脇を隠せず、拘束のため満足に反応もできず、唯一残った叫び声という発散方法さえ——奪われてしまった。

くすぐったさを原液のまま、じっと黙って受け入れるしかなくなったのだ。

「可愛いよお。その反抗的な態度も、生意気な心も、悪いお口も、ぜえーんぶ可愛いっ。そのせいで必要以上に痛めつけられちゃうとことかあ、ホントに素敵！ あのね、苦痛っていうのはね、正気であるほど色濃くなるものなんだよ。あなたは自分の強さ故に苦しむんだよ。尊厳とかプライドとか正義とか、バッキバキに折ってあげるからね！」

「…………ッ！ ……ッッ！！」

「そんな形相で睨んでも一、あと3時間は外してあげないよ。……さ、これから入れ替わり立ち代わりでずーっと責めてあげるからねっ」

「————ッッ！！」

訴えることも叫ぶことも許されない。ただ苛烈なくすぐったさを覚え続けるだけの器官と化してしまった。もうそこには尋問や調査としての意義なんて残っていない。見開いた両眼から涙を流したり、身体を痛々しく跳ねさせたり、顔を苦痛に大きく歪めたり、淫紋を光らせながら股間から潮を吹いたり——そういった反応を余すところ無く淫魔達に視姦され、楽しまれる。ただそれだけの存在へと堕ちてしまった。

これ以上は無いと思っていた地獄がさらに膨れ上がり、180分もの間、私のことを苛み続けたのだった——。